

喫茶の伝播と変遷 — イスタンブルを事例として —

木下純平

ご紹介いただきました木下純平と申します。本日は喫茶の伝播と変遷について、イスタンブルを事例として発表させていただきます。

まず、今回の発表では、喫茶という生活に密着した習俗を「飲料」「道具」「作法」などの要素から検証し、それらがどのような要因で伝播し、伝播先の地域の文化と融合し、地域独自ともいえる喫茶の形態を形成してきたのか、ということ、二〇世紀におけるトルコ共和国、イスタンブルにおける紅茶に関連した喫茶を事例として探っていきます。

そこで、喫茶とはまず何かということなのですけれども、ここでは喫茶を茶やコーヒーを飲む習俗であり、歴史とともに世界の多くの人々の日常の習慣となり、日本の茶道のように伝統文化も形成してきたものとして捉えておきます。

喫茶が多くの地域の生活に浸透、定着した理由として、まず茶やコーヒーという飲料自体が持つ覚醒作用などの効能があげられますが、その効能とともに、人の集まる時間や空間をつくり出すということも、世界各地に習慣として定着する重要な要因としてあげられます。それは、客をもてなし、親交を深め、情報交換の場、集会の場となるとともに、店に特定の目的を持った人々のみが集まりクラブ化する場合もあるなど、人々の生活において、社会機能をもつ場を形成していくことの重要性も定着の要因の一つとなったということです。

そして、喫茶の場の多様な利用のされ方は、顧客の用途に合わせて、多様な喫茶の場を形成していくことにもつながったといえます。

このような喫茶の場で嗜まれる喫茶の習慣は「飲料」「道具」「作法」からなる喫茶文化一式とも言えるものであり、

喫茶の伝播と変遷（木下）

ある時代に作られた道具や作法が、世代を超えて受け継がれることで、固有の文化とも見なされるものでもあります。

その一方で、喫茶は歴史の中で政治、経済、宗教など、さまざまな要因によって各地に伝播するとともに、伝播地の文化と融合することで、伝播した喫茶文化一式から新たに分化、変容し、地域的特徴をそなえた喫茶文化一式が形成されるといふように流動的なものでもあります。

このような喫茶は、食文化研究でいうところの「文化の諸相の中でも日常生活に密着した側面、つまり暮らしの文化というものには民族の伝統的な価値体系が強く作用している」ものであり、喫茶の研究は「文化をそなえた存在としての人間像、具体的な人間像をとらえる」ものであるといえます。

喫茶の体系的な先行研究としては、William H. Ukers という方が書いた「All about coffee(1922)」や「All about tea(1935)」が有名ですが、二〇世紀前半に書かれた古典であります。日本国内においてもユーカーズの研究を念頭に、「茶の文化に関する総合的研究」というものが、国立民族学博物館の共同研究の中で一九七八年から七九年度に行われていました。

この共同研究では、茶樹の生態から茶の人体への影響や

利用形態の類型化、また日本を中心に中国、イギリスや東南アジア各国における喫茶が紹介されています。コーヒーについては原産地であるエチオピアのコーヒー文化などが触れられています。その後も、守屋毅氏、石毛直道氏、松下智氏などによって、日本を中心に東アジア、東南アジアとの喫茶の比較研究が行われてきました。

日本の先行研究においては東アジアや西ヨーロッパなどが多いのですが、中近東の喫茶の体系的な研究というものは、ほとんど行われていない状況であります。この中近東という地域は、トルコ共和国やイラン、エジプトなどを含み、古代からユーラシアの東西を結ぶ重要な地域でありました。喫茶についても一六世紀にはコーヒーを飲む習慣が定着し、ヨーロッパにコーヒーを伝え、ヨーロッパの喫茶文化へ大きな影響を与えた地域ということからも、喫茶にとって重要な地域であるといえます。一九世紀後半以降になると、紅茶が庶民の生活の中でも飲まれるようになり、二〇世紀後半には消費量を急激に延ばしていきます。そして、現在では日常生活に紅茶は欠かせなくなるほど定着した地域となっています。

中近東の喫茶の場合は、コーヒーを中心に飲む喫茶に、紅茶を飲む喫茶が入り込むことで、紅茶以前のコーヒー文化と融合したユニークで多様な喫茶文化が形成されている地

域だといえます。そして、喫茶という日常生活に密着した習俗が、どのような要因によって伝播し、地域固有とも言える喫茶を形成してきたのかについて、政治的、経済的、社会的側面から検証できることから重要な地域であると言えます。

そこで今回報告する、トルコ共和国のイスタンブールの選理由なのですが、ここには三つほど理由があります。まず第一に、歴史的、地理的重要性が高いこと、第二に、多様な顧客をターゲットとした喫茶の店に多様な形態があること、第三に近年定着した「伝統」としての紅茶を飲む喫茶が主流となっていることがあります。

まず、一つ目の歴史的、地理的重要性としては、イスタンブールがオスマン帝国の政治、経済、文化の中心であり、東西貿易の重要な拠点として栄えた街であるという点にあります。オスマン帝国では一六世紀前半に、コーヒーを飲む喫茶が定着していたエジプトや、コーヒーの積み出し港となっていたモカを領域に収めた後、一六世紀半ばになってダマスカスの商人によってイスタンブールにコーヒーハウスがつくられています。その後オスマン帝国の人々を通じて、オーストリアやフランスなどヨーロッパにコーヒーを飲む喫茶が伝わるといふように、イスタンブールはコーヒーの喫茶文化の結節点となった街でもあります。

そして、一九世紀後半にはペルシアから紅茶を飲む喫茶がイスタンブールに伝播し、人々の生活に定着していく過程から、コーヒーを飲む喫茶が、紅茶を飲む喫茶にどのような影響を与えてきたかを検証することができる点でも、イスタンブールは重要な街と言えます。

二つ目の、多様な顧客をターゲットとした喫茶の店の多様性ですが、イスタンブールは大都市ゆえに地元の男性の社交の場となる店だけでなく、男女とも気軽に入ることができる店、音楽を楽しむための店、商人相手の出前専門の店、職業別の同業者間の情報交換の場となる店など、多様な顧客をターゲットとしたさまざまな喫茶の場の事例があります。そこには周辺諸国の類縁性とともに人々の習慣や文化、社会規範などを反映させた独特の喫茶を見ることができます。

そして三つ目の理由として、紅茶を飲む喫茶が近年定着し、「伝統」となったことがあげられます。これは本発表で検証の対象とした「紅茶」というものが、一九世紀末にはペルシアから伝わっていたものの、一九五〇年代以降ようやくトルコの庶民の生活に定着した、外来の新しい飲料であるにもかかわらず、既に伝統的な飲料として現地の人々に受けとめられている点にあります。そのため、一九五〇年代以前の喫茶の状況を記憶している人々からも

喫茶の伝播と変遷（木下）

まだ情報を直接得る可能性が高く、「伝統」となった紅茶を飲む喫茶の定着過程を追うことができる点でもイスタンブルは重要であると言えます。また、政策や商業化、工業化の影響の検証についても、喫茶の習慣、文化の浸透、定着の年代が新しいため、情報が多く残り、法律の施行やインフラの整備状況などを具体的に細かく追うことが可能であると考えています。

以上が地域の選定理由であり、歴史的、地理的広がり、政治、経済、工業の検証や、人々への聞き取り調査から、具体的に喫茶の伝播と変遷が考察できるように考えると考えられますが、本発表においては、二〇世紀のイスタンブルの紅茶を飲む喫茶を中心に、喫茶の伝播と変遷の過程を検証していきます。

今回の検証では、喫茶の構成要素として、人が喫茶系飲料を飲むために最低限必要な紅茶などの「飲料」、茶碗ややかんなどの「道具」、入れ方、飲み方などの「作法」を対象として、これらの要素がそれぞれいつ、どこから伝播し、地域固有の文化と融合して変容を遂げ、独自性を獲得していったのかを事例から見ていきます。そして、これらの要素とともに、多様な顧客をターゲットとしたさまざまな喫茶の場の事例を検証することで、周辺国との類縁性とともに人々の習慣や文化、社会規範などを反映させた多様

な喫茶の場の形態をとらえていきます。

以上を踏まえ、ここからはイスタンブルの喫茶の事例を説明させていただきます。まず、イスタンブルのあるトルコ共和国の茶の消費の現状をみると、国内の茶の消費量は二〇〇五年度には二一万五〇八六トンで世界第三位となっています。国内のコーヒーと茶の消費量の割合については、総消費量で見ると茶がコーヒーの八〇九倍は消費されています。国民一人当たりの茶の消費量は年間約三キログラムで、世界第四位となっており、日本の三倍ぐらいの消費量となっています。

そして、茶生産においては、二〇〇五年度では生産量が二一万七五四〇トンで、世界五位となっております。図一のように一九六〇年から二〇〇五年の生産量、消費量の変化を見ると、急激に伸びており、大体生産量と消費量がほぼ同じとなっています。つまり、国内で生産された茶葉はほとんど国内で消費されていることがわかります。このような生産量と消費量の点からも、現在トルコは世界でも有数の茶の生産・消費国と言えますけれども、この紅茶を飲む習慣というのは、一九世紀後半になってイスタンブルに移り住んできたペルシア人を中心に広まった新しい習慣にすぎません。

そこでまず、「飲料」としてのチャイ（紅茶）の浸透と

いうことを考えていきたいと思えます。チャイはイスタンブルに一九世紀にペルシアから伝わるとともに、「チャイハーネ」「チャイオジャール」というようなチャイを冠する店が作られていきました。そして、第一次大戦以降、コーヒーの価格の高騰によって、安価なチャイが多く飲まれるようになっていきます。そして、一九六〇年代前後、トルコ国内において、紅茶が大量生産されるようになってからは、都心だけでなく田舎や遊牧民の間にもチャイは定着していきました。そして、一九七〇年代以降は図一のように、生産量、消費量ともに急激に伸びていくことがわかります。

チャイとともに重要な喫茶飲料であるコーヒーにも少し触れておくと、一六世紀以降に形成されたイスタンブルにおける喫茶の場が「カフヴェハーネ」や「カフヴェ」などと呼ばれていたように、当時は、カフヴェつまりコーヒーが喫茶の場の主たる飲料であったと言えます。現在ではチャイも飲まれています。店舗に冠する名前からは定着時点の飲料の種類と年代が見えてくると考えられます。

次に、「道具」の現地化を見ていきます。まず、グラスの変遷ですが、現在トルコ国内でチャイを飲む際には、チューリップ型グラスのチャイバルダーウの利用が主流となっています。この形のグラスはトルコ周辺のイスラムの国々ではそれほど見かけることはありません。

史苑（第七一巻第二号）

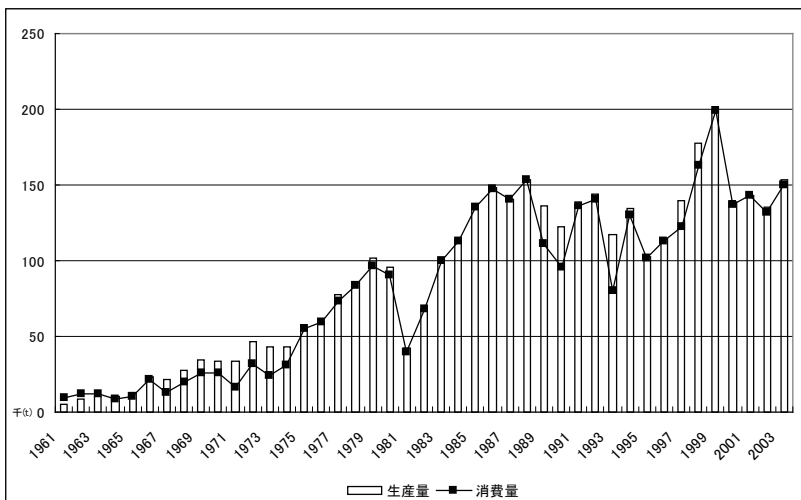


図1 トルコにおける紅茶の生産量と消費量

(FOOD AND AGRICULTURE ORGANIZATION OF THE UNITED NATIONS の統計データより作成)

一九世紀以降にトルコにチャイが伝播した際の器については、今のところ不明ですが、チューリップ型のチャイバルダーウというのは、一九三五年にアタチュルクによってトルコ初のガラスメーカーとして創業された Pasabalye 社が現在製造を行っていることから、トルコ独自の茶器であるといえる可能性もあります。

そしてこの形状のグラスは、一九五〇年に書かれたトルコ人作家のサイト・ファアイクの短編小説の「裏町のカフェ」にも、イスタンブルのカフヴェで利用されている様子が描かれておりまして、一九五〇年以前には既にチャイ用のグラスとして庶民のカフヴェで利用されていたと考えられます。

そして、現在ではチャイバルダーウは、イラン、モロッコ、ウズベキスタンや、シンガポールのムスリム街など、イスラム圏を中心に輸出されています。このことは実際に現地を確認しておりまして、現地の物価と比べても値段的にはそれほど高くないものになっています。そのため、今後、諸地域の喫茶文化へのトルコ製チャイバルダーウの浸透も考えられます。

「道具」の現地化のもう一つの事例として、サモワールとチャイダンルックというものを挙げておきます。

まず、トルコでチャイダンルック呼ばれる二段式のやか

んですが、現在のトルコの家庭には必ずあると言われていきます。チャイダンルックを使ったお茶の入れ方は、下のかんでまずお湯を沸かして、上のかんに茶葉とお湯を入れ、一分ほど蒸らし、紅茶の原液みたいなものをつくっておきます。そして飲む際には、グラスに原液の紅茶をグラス半分ほどそそぎ、後は好みの量にお湯で割って、個人で砂糖を加えます。この使い方の原理はサモワールと同じといえます。

現在はトルコの家庭に当たり前のようにあるチャイダンルックですが、一九世紀にチャイがトルコへ伝播した時には、家庭でロシアのサモワールを用いていたと考えられ、サイト・ファアイクの一九三六年の短編小説にも「サモワール」と題した内容のものがありません。この小説では、母の思い出とともにサモワールが描かれていることから、一九三〇年から四〇年ごろのイスタンブルの家庭にはサモワールがあり、一家団欒を象徴するものであったことがうかがえます。発祥の地のロシアでは、一八四〇年ごろに小説にも登場し始め、一八七〇年のドストエフスキーの「未成年」という小説にも、サモワールが生活の必需品として登場しています。

その後、トルコでチャイを飲む喫茶が家庭に定着していく中で、ペルシア経由で伝わったサモワールから、ストー

ブなどに乗せるだけの家庭用の簡易版としてチャイダン
ルックが作り出されたと考えられます。

このように現代のトルコの生活にチャイダンルックとし
て取り込まれたサモワールですが、トルコにチャイを伝え
たペルシアにおいてサモワールは現在もそのまま利用され
ています。その一方で、発祥の地とされるロシアにおい
ては現在ではほとんど使われなくなっています。こ
のことは、サモワールなどの茶を淹れるための道具が、伝
播した後、歴史とともに人々の生活に取り込まれ、定着や
変容をしていくことを示す一つの事例となるといえます。

喫茶の要素の三つ目に、「作法」としての砂糖の使い方
を挙げておきます。現在、イスタンブルでは角砂糖がチャ
イとともに出され、三つ、四つと入れて飲まれます。しか
し、ペルシアから紅茶が伝播した時点では、ガンドという
甜菜糖の塊を小さく砕いて、口に含まながら飲んでいたと
考えられます。現在でもイランやトルコ東部においてガン
ドや氷砂糖などを口に含まながらチャイを飲む光景をよく
みることができます。

また、イランではガンドを客の前で割ることがもてなし
の一つになるということもあることから、砂糖に歓待の象
徴的意味もあると考えられます。この砂糖をかじりながら
飲む飲み方については、ロシアにもあるため、ロシアから

ペルシアに伝播し、トルコにも伝わった可能性も考えられ
ます。

現代のイスタンブルにおいて、砂糖をかじりながら飲む
飲み方を目にすることはすくないのですが、その理由とし
て、角砂糖や粉末状などの溶けやすい砂糖が、ガンドや氷
砂糖のようになかなか溶けない砂糖よりも安価に出回った
ために、口に砂糖を含めながら飲む必要はなくなったのだ
と考えられます。この変化に伴って、砂糖を混ぜるために
必要となるスプーンもグラスに添えられるのではないかと
推察できます。

もう一つ、飲み方として、チャイを受け皿に移して飲む
という飲み方もあります。現在のトルコではあまり見かけ
ないのですが、昔はロシアでもイギリスでも見られた飲み
方で、イランでも行われていました。これも「作法」の一
つとして、グラスを乗せるソーサという道具とともに伝播
してきたものであるかと考えています。

このように喫茶の各要素を検証してみると、チャイの定
着に際して各要素間だけでなく「道具」の中でも定着や変
容のタイミングが異なっていることも見えてきます。つま
りこれは喫茶が徐々に現地化していく過程をみることだと
もいえます。

次に、イスタンブルにおける喫茶の場の多様化に触れさ

喫茶の伝播と変遷（木下）

せていただきます。オスマン帝国の首都イスタンブルにコーヒーハウスが初めて作られたのは一五五四年ごろといわれており、喫茶はアレップやダマスカスから移り住んだ商人によって持ち込まれた、外来の習慣でありました。その後、街中にコーヒーハウスがふえるにつれて、一八世紀ごろには高級官僚が出入りし宴席にも使われた高級なコーヒーハウスや、簡易なコーヒーキオスク、イエニチエリのコーヒーハウスのような各兵団専用のコーヒーハウスも作られました。そして、一九世紀初頭にはオスマン帝国によってタンジマートが進められる中で、街には西洋風のカフェも作られるなど、時代とともに多様な喫茶の場が形成されていきました。

一九世紀後半の紅茶の伝播、浸透後は、「カフヴェハーネ」のようにコーヒーを冠した店の名前はそのままですが、コーヒーのかわりに安価になったチャイが徐々に飲まれるようになります。

現在も多様な形態の喫茶の場の一つに、「クラトハーネ」があり、男性が水たばこを吸いながらゲームをして、チャイを飲む、男の社交場というところがあります。

そしてチャイの浸透とともに増えた「茶の家」を意味する「チャイエヴィ」は、男性の社交場にも同じようになりますが、健全さをアピールするために店内でのテーブル

ゲームは禁止されていることがあります。また、「ストリートカフェ」と呼ばれるものもあり、これは街なかにあるものなのですが、都市生活のステイタスシンボルになりつつあり、「クラトハーネ」のような社会性をもたないことで、女性客の利用を容易にしているといわれています。



写真1 チャイジ（2010年筆者撮影）

その他には、「チャイオジャーウ」というものがあり、チャイの出前が中心となつている店舗形態です。カパルチャルシュ（グランドバザール）など大きな商店街だけでなく、小さなチャルシュ（市場）などにもあり、商店街の一角のスペースに紅茶を入れるための茶道具、茶具一式だけがあり、基本的には客席はありません。この「チャイオジャーウ」での注文方法は、商店と直通で結ばれたインターホンや電話によつて行われ、注文後数分以内にチャイやコーヒーが商店に写真一のようなチャイジと呼ばれる配達人によつて届けられるという仕組みになっています。

その他にも、イスタンブルには様々なお茶を飲む場があります。「チャイハーネ」や「カフェ」「カフヴェハーネ」「チャイバフチェシ」「デルネッキ」「ロカル」というように、様々な形式の喫茶の場が時代とともに多様に形成されてきています。これらの喫茶の場は対象とする顧客も異なつていて、本を読みたい人、ゲームをしたい人の集まる店、地元の男性の社交場としてのみ使われる店、家族連れや男女とともに入ることができる店、同業者や退役軍人、政治的目的を持った団体専用のクラブ形式の店などがあります。これら喫茶の場は、社会的機能も備えた文化複合ともいえ、物質文化とともに喫茶文化を形成しており、それはトルコの喫茶文化の特徴として見るができると思います。

また、トルコには、喫茶の店以外の社交の場も古くから存在していました。まず、ハمامと呼ばれるトルコのお風呂ですが、女性にとつては憩いの場として、喫茶の場のような役割を果たし、お風呂の後にコーヒーやチャイを飲みながら世間話をするという、女性の社交場という面がありました。その他、ボザハーネというものもあり、そこではボザという小麦の甘酒みたいなものを飲むところもあり、また、古くからイスタンブルには酒を出す居酒屋もあつたのですが、昔はイスラム教徒による店はなく、キリスト教徒やユダヤ教徒が営んでいた店にイスラム教徒でお酒を飲みたい人が出入りしていたということです。このような喫茶以外の社交場について見ていくことから、現在の喫茶の店の形態について考えることにつながると考えています。

以上、現代のトルコ共和国のイスタンブルにおける喫茶について、「飲料」として紅茶、「道具」としてチャイ用グラスのチャイバルダーウとチャイダンルック、「作法」として紅茶の入れ方や砂糖の使い方という事例から、日常生活に定着した喫茶という習俗がどのように伝播先の地域の文化と融合し、地域独自ともいえる喫茶の形態を形成しているかを見てきました。また、喫茶の場についても、さま

喫茶の伝播と変遷（木下）

さまざまな顧客のニーズや人々の暮らしにあわせて、多様化していくものであることを見ることができました。

そして、一九世紀にペルシアから紅茶を飲む喫茶が、「飲料」「道具」「作法」という喫茶文化一式として伝播し、徐々にイスタンブルで現地化していく過程において、要素によって変容のタイミングが異なっていることも見えてきたかと思えます。

イスタンブルにおける、これらの要素の変容については、茶葉や砂糖には生産、流通という国家の政策面の要因が強く、また茶道具に関しては、製造技術の導入という技術面の要因とともに、現地の人々の習慣や文化的要素を取り込んだ道具の機能やデザインによって作り出されていったことが考えられます。

また、喫茶の場の多様化については、一九世紀オスマン帝国が西洋化を進めていく時代に、男性の社交場としての面の強かったカフェヴェハーネなどに対して、西洋化や近代化に伴いイスタンブルに女性も入ることができるよう西洋風カフェやチャイハーネなどが形成されています。これは喫茶の場の多様化を通して、イスラム社会における女性の立場の変化についても見ることも意味していません。

そして、今回の発表を踏まえた今後の課題として、喫茶の歴史的、地理的広がり。政治、経済、工業の影響の検証、人々への聞き取り調査とともに、喫茶がじっくり出す時間と空間から喫茶の社会的意味についてもとらえて、イスタンブルの喫茶の習慣、文化の浸透と定着過程、多様な喫茶の場の形成要因を探っていくつもりです。そして今後イスタンブル以外の都市の調査を進めていくことで、喫茶の要素の同質性と異質性、他地域との差異を綿密に比較検討し、どのように習慣や文化が伝播し、受容され、また変容してきたのかをより具体的に考察することで、中近東とその周辺地域まで視野に入れた、喫茶という地理的、歴史的な広がりを持った習慣、文化の伝播と変遷の研究へとつなげていくことができると考えております。

以上、ご清聴ありがとうございます。

（本学文学研究科超域文化学専攻博士課程後期課程）